

現代史の学習過程における歴史意識の問題

—生徒の社会意識の分析とその指導— (第三報)

高森 充・都築 亭・織田長繁・中尾正三

I. 意図と問題の所在

昭和32年度より、本校の社会科研究会は「生徒の社会意識の分析とその指導」を研究テーマにえらび、マス・コミュニケーションが社会意識に及ぼす影響についての研究と併行して、主として高校生が受験期にあることによって、どのような影響をその社会意識にうけているかという点について、共同研究をすすめて来た。(この点については紀要第3集第4集参照)

ただその場合、「社会意識」のとりあげ方は、ごく一般的な意味において、時事問題に関する関心と態度・及び人間の生き方に關する態度を見ることに主たる目的があったわけだし、高校生が受験期であることによって、どのような意識や態度を身につけているかを見出そうとすることに視角がむけられていた。それが高校での社会科教育をすすめる上に、どうしてもはっきりしておかなければならない前提であり、又一つの問題点ではあるにしても、しかしそれだけで生徒の社会意識の分析に対する視角は充分であるとはいえないであろう。そして又、現実に社会科教育を実践する場合、こうした意識のとらえ方の中から直接に実践への糧を見出すことは困難であったようだ。

それは一つには社会意識のとらえ方が余りにも一般的抽象的でありすぎたということかもしれない。生徒の社会意識の中に投影されている社会的現実は、教育によっては如何ともしがたい領域に大きくかかっているものであり、社会科教育によってその意識を変革することはたしかにむずかしくなって来ていると思われる。

現実について言えば、高校ばかりでなく、中学校においても、社会科という教科はもはやその発足当初の総合教科としての性格を失っており、教科名としては社会科という名が通用していても、実質的には、<地理><歴史><社会>科に他ならないというのが実情ではないだろうか。しかも受験競争の激化という現実が、中学においてさえも、社会科を歴史や地理の単なる知識教科においやろうとしていることも事実である。

だがたとえそうした現実がみとめられるにしても、われわれは社会科が単に地名や歴史上の人物名、年代を暗記するための教科であってはならないと思う。社会科の基本的な性格はやはり、「社会生活を正しく理解させ、個性豊かで民主的な国家社会の形成者として必要な資質を養うことを使命としている」(中学校社会指導書)点にあるのではないだろうか。歴史学習の目標も「身近なことがらや現代社会の当面する種々の問題を歴史的に考えようとする態度を育てる」(学習指導要領)ことを見おととしてはならないはずである。

地理的分野の学習過程の中において、単なる断片的な知識の集成だけでなく、その中で、地域的・社会的なものの見方が育てられるべきだろうし、歴史的分野の学習を通して、やはり歴史的なものの見分けが形成されるべきだと思う。そしてこうしたものの見方——意識こそが社会科教育の中で考えられねばならない社会意識ではないだろうか。

この小論では、とくにそのうちで歴史の学習における意識形成の問題だけに限って考えてみたい。他の分野でもあるいは同じことが考えられていいと思うけれど、教科課程や教科書の改訂のときにいつも歴史教育の在り方が問題とされるように、現在の段階においてものの見方、考え方、そして意識が問題とされてくるのは、社会科の中でもとくに歴史分野に関してであると思うからである。歴史の見方、歴史的なものの考え方をどう育てたらよいかということは、もっと問題とされてもよいように思う。

それを歴史意識とよんでいいか、歴史感覚としてとらえてよいかはわからないけれど、現在の歴史教育は何らかの歴史的なものの見方を生徒にあたえていることはたしかである。そして又、旧世代の歴史感覚とははるかにちがったものを現在の若い世代はもっているようにも思う。現在の日本における世代の断絶も、つきつめていえば、共通の歴史意識の欠如ということかもしれない。だがここで考えておかなければならないのは、若い世代——中学・高校生たちがその生活体験にもとづいて形成している歴史感覚というものは、学校での教育が意図している歴史意識とはかなりずれてい

るということである。

生徒たちがその成長体験にもとづいて獲得している歴史感覚を無視して、歴史教育がすすめられたとしたら、おそらくその意図通りの成果をあげることはむずかしいだろうし、歴史の学習過程を通じてのぞましい意識の形成がはかられていたとしても、実際にはそれとは全くちがった意識や態度を身につけてしまう可能性は極めて大きいと言わなければならない。以上のような理由から、我々は社会科、その中の歴史教育をすすめる場合において、その生徒の歴史感覚をどのようにとらえていったらよいか、又その学習過程の中において、意図的に特殊な教材なり、学習内容なりをもってくることによって、生徒の歴史感覚がどのようにかえられるものかを今ここで考えてみたいと思う。

とくに現代史の学習過程をとりだしたのは、それが歴史学で最も重視されている点だからということ、及び生徒の意識を考える場合最も考えやすいということのためである。

2. 生徒の歴史意識あるいは

歴史感覚について

歴史意識ということばは、じかしあいまいな概念である。歴史学のみでなく、教育学からも社会心理学の立場からもたびたび歴史意識という語が使われるし、歴史意識を培うための歴史教育ということとも、いろいろな立場で要求されている。だからまずははじめにその言葉の規定をのべておきたい。

後藤岩男氏によれば、歴史意識は

第1類 いつどこで、誰がどのように時空的な規定に強く関心するもの。

第2類 歴史的関心の型質等の内的事実に強く関心するもの。

第3類 歴史的事象の推移に強く関心するもの。

第4類 歴史的事象があったか、なかったかに強く関心するもの。（児童心理1の7）

に分類されている。

又和歌森太郎氏によれば「歴史的なものに対する頭の働きが歴史意識である」と規定され、「歴史意識のもっとも素朴なものは昔に対する意識、いいかえればものの始まりに対する意識であり、つづいてあらわれるのが今と昔とを対比させる意識、さらにすすむと昔から今に至る変遷ということまで把握されるような段階に来る」そしてそれにつづいて「発展するものが歴史的因果の意識であり」さらに「歴史意識の最高の類型は時代の意識である」（東京教育大、大塚史学会編 歴史教育講座中 歴史意識の発達）とされ、生徒

の歴史意識の発達状況をとらえた上で、歴史教育の内容が確立されなければならないとされている。

これらは最も一般的常識的意味での歴史意識についての規定といえるかもしれない。だがこうした歴史意識は生徒の年令的な発達段階に応する意識の類型をあらわすことはできるとしても、こうした意味での歴史意識を育てるために現在の歴史教育が行われるべきだと考えることはわれわれにはできない。歴史教育は決してもののはじめを意識させることではなく、又単に時代の意識をあたえることだけでもないからである。現在の歴史教育においては、むしろそうした意識ではなくて、正に現実の社会的課題を解決するための歴史的なものの見方、考え方方が問題とされねばならないと思うのである。誤解をさけるためにとくにことわっておくとすれば、われわれが今問題としようとするのはそうした歴史的なものの見方、考え方であり、歴史意識*というよりむしろ歴史感覚といった方がよいかもしない。

*橋川文三氏によれば、それは「歴史学」はもとより「歴史的認識」「歴史的思考」「歴史的態度」「歴史的立場」等々とよばれるすべてのものの根底にあって、それらと関連しながらも、基本的にはそれらと異なる一種の精神的能力のことであるという。（近代日本思想史講座 第七巻）

中学校における現代史の学習過程について考えてみよう。第一次大戦——政党政治——ファシズムの成長——太平洋戦争——戦後の日本という現代史のプロセスは、正に出来事 *res gestae* として存在したし、その現代史の学習が歴史の学習過程の中で最も重要な位置をしめるものとされている。

ただその場合に1931年9月の柳条溝の鉄道爆破事件や、1932年5月の犬養首相の暗殺事件（5.15事件）というような事実が、ただ知識として生徒にあたえられることだけが歴史学習ではないはずである。その事実よりもむしろその事実を通して、生徒がどのような現代史の見方をもって来るかということの方が問題なのではないだろうか。

政党政治の終末からファシズムの成立、戦争への道が日本の発展にとってあるべき当然の道であったとするような教科書は、今の所あらわれていないし、「この大戦について反省し特に戦争のもたらした人類の不幸について考えさせることが大切である」と学習指導要領も述べている。

現代史の学習過程における歴史意識の問題

教科書のニュアンスのちがいによって、多少のちがいはあるにしても、現在の中学校の学習過程を通してだけだったら、戦争に至る日本の辿った道を無批判に肯定する態度は生れ得ないと思うし、戦争に対する生徒たちの目はたしかに批判的であるといえよう。

だが問題はそこにある。ただ知識的体系によってのみ学習過程が考えられた場合、その現代史に対する批判的な見方や知識は生徒たちの意識や感覚に結びつくことができず、ただ概念的に戦争を否定する考えをもたせるだけに終りはしないだろうか。現実に反動的な立場からの感覚的な働きかけが強化された場合には簡単にその方向になびいてしまうような可能性がその中にあるのではないだろうか。

現在の若い世代——高校生・中学生の世代はその成長体験の中にはほとんど戦争体験をもたず、したがって戦前の体制感覚を全くもっていない世代である。この点は第一次戦後派世代が戦争に対するはげしい抵抗感覚をもち、戦前の価値体系の一切を否定する所から出発しているのと非常に対象的であるといえよう。したがって純粋に戦後の体制感覚しかもっていないこの世代の歴史感覚——とくに戦争に対する否定的な観念はそれ以上の世代の歴史感覚とは相當にへだたりをもっていると考えなければならないと思う。

以下一つの試みとしてその歴史感覚を学習過程の中でとらえた結果をまとめてみよう。

3. 学習過程における一つの試み

——レコードによる太平洋戦争史への反応——

現代史の学習過程において、意図的に特殊な教材(聴視覚教材——ここではレコード)をあたえ、又その取扱い方をかえることによって、生徒の歴史感覚にどのような影響がみられるかを考察するため、先づ次のような比較検討を試みた。

(A) 実験方法

中学校三年生(90名)について(注1)社会科単元「国際関係と平和」の問題に入る直前に行なった。従って既に二年生当時、日本の歴史は一通り学習済みである。

教材としてえらんだのは「日本かく戦えり」という太平洋戦争についての弁明的な意図で構成された一枚のレコードである。(注2)その内容は

[1]序曲「われらかく戦えり」として満洲事変から

原爆投下までの大戦の解説、そしてその中で、「原爆の一投によって破れた日本」ではあったが、ただ単なる戦争批判や戦争反対は、ただ勝利を信じて死んで行った英霊をむちうつ行為ではないか、として、大戦にいたる経過をかえりみ、反省してみようという編集趣旨の弁明。

昭和8年の国際連盟脱退前後の情勢、松岡全権の活躍によって「屈辱の五・五・三」が葬り去られ、昭和11年、ロンドン軍縮会議脱退、日独防共協定、日独伊三国同盟にいたる経過は日本としては止むを得ざる道すぢであったという説明。

A B C D包囲陣は何がための軍備であるか、日本が平和への努力をつづけて打開をはかっていたのに(昭和16年4月からの日米交渉をさす)米国はいたずらに「日本は支那全土より即時撤兵すべし」「日本は南京政府を否認すべし」「日独伊三国同盟を離脱すべし」との三原則を提示しつづけるのみではなかったか。したがってそれに対し日本がとりうる途は、12月8日の歴史的な宣戦の大詔以外にはありえなかったとして、臨時ニュース、東条首相の談話、そしてハワイ真珠湾での緒戦の大勝利のニュース、など当時のろく音によって、非常にセンセイショナルな説明を加えようとする。

[2]昭和17年2月18日の第一次戦勝の国民祝賀日、4月の珊瑚海海戦、6月のミッドウェー海戦を経て、次第に戦局日本に不利となる。この間、アジアの情勢——緒戦の勝利に酔った軍部と政府が、日本を中心に北は中国大陸から南は豪州まで、西はインドから東はハワイに至る「大東亜共栄圏」建設の幻想。だがアメリカ軍の反攻は昭和17年の夏にはじまって急進撃。國民がそれらの真相を知らされないまま、遂に昭和20年8月6日、広島に落された原子爆弾。廃墟と化した国土、悲惨な戦争被害の中で我が國は敗れた。……「原爆許すまじ」の合唱の中にレコードが終る。

以上略述した内容のレコード(所要時間、50分)をA・B両クラスの内、A(46名)には[1]、[2]の両方を聴かせ、B(44名)には[1]のみを聴かせた。

(B) 結果の分析

先づ聴取の経過に伴う生徒の反応をここで客観的に測定することは困難であるが、代表的な生徒の聴取感想文の事例と、観察記録によって整理した例をあげよう。

共同研究

○時間の経過と聴取感想（Aクラスの例）

	〔内 容〕	〔感 想 例〕
	(0.00分) 1. 我らかく戦えり (序)	
	(5.00) 2. レマン湖畔の弔鐘 (国際連盟脱退) 録音=松岡全権	「日本が国際連盟を脱退したのは止むを得ないと思った」
	(8.00) 3. 勝利の軍艦旗 (海軍条約破棄)	「何か自分も海軍に入りたいような気がした」
1	(12.00) 4. 盟友互に結びて (枢軸同盟と汪政権)	
	(15.00) 5. 帰らぬ平和の小鳩 (A・B・C・D線の結成)	「米英が日本を圧迫したから戦争が起ったのも無理がない」
	(18.00) 6. 歴史の日 12月8日	「朝の臨時ニュースを聞いた人々の気持はどんなであろう」
	(21.00) 7. 大詔を挙げ奉りて (録音・東條首相)	「日本軍の進出に感激した」
	(22.00) 8. ハワイ海戦 (ニュース)	
	(25.00) 9. マレー沖海戦	「レコードでは日本がよほど強い国に思える」
	(28.00) 10. シンガポール陥落	
	(33.00) 11. 戦捷の春 (戦勝祝賀)	「戦争のひげきの大きさを想像して寒けがした」
2	(36.00) 12. 壮烈特別攻撃隊	
	(40.00) 13. 瑪瑙海海戦 (独仏の情勢を含む)	
	(43.00) 14. 起てよインド (アジアの決意)	「原爆のおそろしさ」
	(45.00) 15. 原爆許すまじ	「原爆許すまじの歌が印象的だった」
	(50.00)	

（聴取中の教室の雰囲気は初めはざわめきや私語があったが、レコード終了後しばらくは静まりかえって、全くの沈黙く状態を示すほど、全体的に何かを感じたようだ）

上記の感想事例に示す如く、レコードのセンセイショナルな内容にひきずられて、時間の経過と共に感想が理性的ではなく、著しく感覚的に受けとめられている。

所で、聴取後の感想文を、(イ)、戦争に対する肯定的感想、(ロ)、中立的感想、(ハ)、否定的感想、(ニ)、感想なし、に区別して整理すると次のようになる。

	A組 (全部聴取)	B組 (1の部のみ)
戦争に対する		
肯定的感想	6	13
中立的感想	12	8
否定的感想	26	12
感想なし	2	11
感想文提出数	46	44

これによつて見ると、明らかにA組（敗戦までの聴取グループ）に戦争に対する肯定的感想は少く、否定的感想は46名中26名で半分以上を占める。しかもA組に於ける肯定的感想も積極的なものでなく、例えば、「國のために多くの犠牲になった人々には本当に氣の毒で有難く思います。目をとじて静かにきいてると涙が出そうになった程非常に感動した」とか「今まで日本の方が無茶であると思っていたが、平和のためにいろいろ試みていたときいて、日本が全て悪かったという考えはなくなった」、「戦争があったと思うと今でも身ぶるいがするが、國の為に戦ってくれた人々をたたえましょう」といった意見である。

これらに対して、Bグループ（戦争初期までの聴取グループ）に於いては、戦争に対する肯定的感想が44名中13名で最も多い。次で否定的感想が12、感想なしが11で、Aグループの2に比して非常に多い。（この場合、感想なしは恐らく、從来教えられてきた戦争批判や、倫理的判断がレコードのセンセイショナルな内容についてゆくことが出来ず、自分の感想や意見を素直に書けなかった結果ではないだろうか）

現代史の学習過程における歴史意識の問題

所でAグループに於ける戦争肯定的感想の例も、多くはレコードの一方的な内容や音楽にひきずられた感情的なものが多く、例えば「力強く感じた、生きがいを感じた」とか、「昔の人は勇気があった」、「……日本政府の責任だけでなく、米英が日本に加えた圧迫が大きかったのだから、日本が戦争を起したのも無理はないと思った」とか「戦争は勝たねばならないと思った。今では戦争を止めることができたようなことを言う人があるが、この頃の事を思えば、それは無理だったと思う」、「当時は天皇のために戦い勝利を続けていた。それに比べて今の私たちは愛国心に大きく欠けていると思った」といった内容である。

一方、A及びB組における中立的感想の多くは、断定的な判断をさけ、むしろ、「レコードを面白く聞いた」とか「わかりにくかった。」とか「どんな気持で戦争をしたのだろうか」とか、「その時の異常なふんいきがよくわかった。調子にのりすぎていた」とか「少しヒステリーじみていた」といった意見が多かった。わずか50分のレコードの内容で、太平洋戦争を評価することを避けているのは、こうした煽動的なものに動かされたり、ひどく感覚的にものを考えないという観点からはむしろ適切な態度とも言えよう。

最後にこのレコード聴取を通じて戦争否定を生徒はどうのように感じ、考えているだろうか。先づAグループの戦争否定感想文例では、原爆の投下と特に「原爆許すまじ」の合唱に大きく感銘を受け、戦争の否定を強調しているものが多い。(注3) 例えば「第一に戦争はいやだということを強く感じた。ことに原子爆弾の恐ろしさにはいまさらながらはっきりわかった。僕等は今平和に過ごしているが、戦争で生命を失った人やその家族の人が全くかわいそうだ。このレコードをきいているとなんとなく恐ろしくなってくる。とにかく戦争はいけない」。これに対して言わば理性的、批判的な戦争否定の感想は少ないが、次の様な例が注目される。「日本軍の初めの勝利に国民はうぬぼれていた。この戦争は始めから日本の不利な立場にもかかわらず戦争したのはおかしいと思う。だからこの戦争は始めからまちがっていた。やはり政府は国民にはいつも本当のことを話すべきだ。新聞やラジオなどがいつも勝った勝ったといっていたのが日本を亡ぼしたのだ」。又「ある一部の人達だけで国民をあのような戦争にひっぱっていった。国民もそれにひきずられたのだが、こんな戦争は二度と起ってはならない。又これからも僕等は力を合わせてそのようにならぬよう、世界の平和をめざして進んで行きたいと思う」、「戦争は二度とやらないという事を強く思った。それで今サイドワ

インダーとかグラマンとかさわいでいるのだが、あんなものを買わないでほしい。買ったとしたら憲法違反になるのではないか」といった意見が見られる。ここではマスコミの一方的報道に対する批判や、団結して平和を守る必要や、現在の時事問題等との関連で考える余裕をもった意見として注目出来よう。

なお特に著しいものとして、世代の断層を明瞭に示し、戦争体験の皆無ということから、戦争当時の狂氣じみた雰囲気を彼らの現在の生活実感からつきはなし感想(レコード自体が馬鹿馬鹿しい内容だと批判出来る生徒も) 少数(2名)あったことは注目してよい。例えば、「戦争前の世の中と戦後の世の中の様子が非常に違うのを感じた。天皇のことを神にして神々しくて顔も上げられないなどと言うと、ふきだしたくなる。そして天皇のために進んで命をささげることが最も立派な人のように話すのを聞いていると、ばかりくなってきた……」。又最も典型的なものとして、「力強い胸をわきたたせるレコードである。しかしこまだつじつまの合わない所が多い。どうも大和男子とはヒューマニストでないらしい。“平和の子鳩は帰ってこなかった”というがそうではなかった。大和魂は外国魂(?)とはくいちがうらしい。考えてみるとそんなアホらしいことと思えるが、それが我が國におこった出来事だということを根において聞くと悲しかった。最後の“ああ許すまじ原爆を”という歌ではいさか胸にジーンときた。始めの内はこのレコードはどういうことが言いたいのかわからなかったが、最後にそれがわかった。そして、これが大和魂の根本主義かなと思って笑えてきた……」むしろこうした感じとり方が戦争体験を経ない若い世代の実感かも知れない。そしてむしろこの実感から出発して、戦争への歴史的批判力が出てくるのかも知れない。しかもこのような事例は高校生の段階になるとその数が多くなる。(注4)

ともあれ、中学三年生では、やはり戦争否定にしろ肯定にしろ、一般に非常に感覚的、感性的にしか把えておらず、一応日本史学習の基礎があるにも拘らず、戦争を歴史的発展や社会経済的因果関係によって批判することが相当に困難であることを示している。従って仮りに社会の情勢が戦争肯定的雰囲気になり、特にマス・コミを通じてのシンボル操作が意識的にそれを行なったり、まして学校の歴史教育が、そのような方向に指導されたりした場合、容易に戦争否定の態度を受け入れてしまうであろう。しかし逆に戦争の絶対的否定をマス・コミや歴史教育が——特にそれが感覚的にうったえる教材を駆使した場合、中学生の年令段階ではこれ又たとえ観念的にではあれ戦争否定の気持と

共同研究

戦争罪悪感は一そう深められるであろう。しかし問題は、それらが如何に歴史意識にまで高められ、理性的な認識にまで定着するかである。

4. おわりに

以上のささやかな試みから、我々は次のことを反省しなければならない。即ち歴史の学習指導において、生徒の歴史感覚や歴史意識を正しく育て、それを感性的認識からさらに深められた正しい認識へ発展させなければならぬということである。しかし歴史学習に限らず、社会科の学習指導に於て、深められた正しい認識は如何にして獲得されるか。——この問題は今日いくつかの試みにも拘らず学習過程=特に如何に知識が獲得され、生きて働く正しい認識にまで発展するかという process そのものが必ずしも明らかでない点からも甚だ難しい問題であるといわねばならない。

この意味で我々の研究は今後、歴史及び、社会科そのものの学習過程の分析を通じて、歴史認識、社会認識が如何にして獲得されるか、そして正しい指導が如何にして可能かを追求しなければならないであろう。従って我々は35年度以降の「社会科に於ける学習過程の分析」特に授業分析を通じて、これらの点を一そう発展させたいと考えている。

〔注記〕

(1) 実験実施日 昭和34年12月5日

なお中学三年の年間指導計画は二人の教官で分担している。この実験は「政治の単元」、「経済の単元」、「社会保障の単元」に続いて、「国際関係と平和の単元」への導入過程において行ったものである。なお対象学年は A、B ともほぼ同質クラスである。

る。

- (2) レコード「日本かく戦えり」—太平洋戦史—
企画・構成・製作：ティチク株式会社
解説：竹脇昌作
 - (3) A組の戦争否定感想文26の内18が原爆についてふ
れている。
 - (4) 高校二年生について昭和34年12月10日に実施した
結果は次のようである。（国際連盟脱退から原爆投
下、敗戦までの全体を聴取）
- | | |
|------------------|-----|
| 肯定的感想 (止むを得なかった) | 26 |
| 中立的感想 | 23 |
| 否定的感想 | 42 |
| 感想なし | 9 |
| | 100 |

この内、中立的感想23の内12はレコードの内容自体に疑問をもっている。例えば「この放送の一種獨り得の調子、悲壯というのが、ヒステリー型というのか。こんな調子が日本を戦争に引きこんだのかも知れない。最後まできいて全くウンザリした」

一方、注目すべきものとして、自分のおかれた現在の生活やその反省と結びつけて、言わば「生きることの意味」として感想を書いている例がある。例えば「放送を聞いている内に私は何かふるいたつ様なものを体の中に感じた。現在の無気力さの中で、私たちは何を目的に生きてゆくのか、何か統制のない現在の心境をもてあましている私には、何か軍隊にあこがれる様な気持が全然ないとは言えない。昔にあこがれる気持を批判しながら、なおあこがれる私は何を求めているのだろうか？」この様な事例は中学生には見当らないことを附記しよう。